平成２９年１月２０日

「平成２８年度　研究集録」巻頭言

変革の未来を生き抜く力を育む〈２１世紀型の学び〉に向かって

校　長　今井　智幸

平成３２年度から「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」が導入され、平成３４年度から「新学習指導要領」が年次進行で実施される。抜本的に見直された新しい学習指導要領の方向性は、新しい時代に必要となる資質・能力の育成である。生きて働く知識・技能の習得、未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成、学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養の確実な育成が、今、学校の喫緊の課題となっている。高等学校教育・大学教育・大学入学者選抜の一体的改革、いわゆる高大接続改革は、無論、若者がこれからの時代をたくましくしなやかに生き抜く力を育む環境を整えるためのものであろう。

また、学習・指導方法の改善も求められている。昨今は小中高を問わず多くの学校で、〈主体的・対話的で深い学び〉の視点から、日々授業改善の取り組みがなされているのが現状ではなかろうか。〈何ができるようになるか〉、〈何を学ぶか〉、〈どのように学ぶか〉が生徒とも共有され、「生きる力」の源泉である「確かな学力」の充実のために、日々授業が試行錯誤され、創意工夫されている。すぐれた実践をされている全国の学校や教師が、書籍や雑誌等でよく紹介されてもいる。ただ、多くの教師は今、多忙な状況に置かれている。その中で、教師としての生命線である授業力を高めようと、日々努力しているのも現実である。

アメリカの発明家で未来学者のレイ・カーツワイルによれば、２０４５年には人工知能（ＡＩ）が人類を超える「シンギュラリティ」（技術的特異点）に到達するとし、シンギュラリティの先にある未来社会に、今多くの関心が寄せられている。ＡＩは人類のサバイバルのためにこそ、開発を加速する必要があるとする考えがある。ＡＩが人類を滅ぼすというより、それがないと人類が滅びるかもしれないという考えだ。一方で、日進月歩の進化を遂げるＡＩは今、自ら考え始めている。人間の命令に対し裏の意図を読むようになれば、人間はＡＩが何を考えているのか把握できない。近未来のＡＩにすごみと怖さを感じる見方もある。

今、教師は〈２１世紀型の学び〉を提供できる専門性、スキルが求められている。生徒の考えを引き出すコミュニケーション力、多様な意見をまとめるファシリテーション力、外部のすぐれた人材を活用するコーディネーション力等である。そんな力量を身に付けた教師たちの日々の授業の下、主体性に富む生徒たちによる〈対話的で深い学び〉が豊かに体験され続けることによって、変革の激しい２１世紀という時代の課題を自ら発見、解決する資質・能力が高められ、そして自立して社会を支える人材が育まれていくのであろう。

ここに掲載された報告は、今年度本校が取り組んできた軌跡のいくつかである。未来を拓く人材の育成を重点目標に職員一丸となって取り組んだ足跡でもある。忌憚のない御意見や御指導・御鞭撻をいただけたら幸いである。